

いきいき山梨ねんりんピック2024

山梨県シルバー俳句大会 入選作品集



◆展示期間 令和6年6月14日（金）～6月16日（日）

◆会場 山梨県立図書館1階「イベントスペース」

主催 いきいき山梨ねんりんピック実行委員会

主管 社会福祉法人 山梨県社会福祉協議会

井上康明選

■特選■

山々はみな顔上げて初明り

北杜市 小山 崇 八〇歳

北岳の雪をけぶらせ黄砂降る

甲府市 津金文夫 八五歳

光り合ふ白根三山冴返る

市川三郷町 三枝 稔 七八歳

あるがまま吹かれるままに草の花

富士河口湖町 梶原道彦 八一歳

枝々に玉なしてをり春の雨

韮崎市 切刀一子 八八歳

■秀作■

亀甲の松の切り口風薫る

中央市 佐々木 いづみ 八四歳

八ヶ岳嵐母校の校歌口ずさむ

韮崎市 武井 ひとみ 七六歳

秋燕の影の連なる山の湖

笛吹市 佐野正司 九一歳

初春や九十年の日焼けの手

富士川町 赤池静江 九三歳

夫の墓初木枯を聴く日かな

上野原市 長田重子 八二歳

ひよつとここに我が名呼ばるる村祭

都留市 板津松男 七五歳

花柄の春の野良着を買ひにけり

笛吹市 石倉美恵子 七六歳

山負うて負うて喜寿なり春田打

北杜市 八代菜美子 七六歳

ゆつくりと雲下りて来て山眠る

北杜市 坂口京子 八三歳

おいと呼ぶ亡夫の声聞く雪しんしん

西桂町 永田梅子 八〇歳

【評】

日々の暮らしの中からさり気ない場面を印象深く表現していました。四囲の山々を親しさとともに新鮮に、季節の情景として捉えた作品に惹かれました。同時に長い歳月とともに過ごした人生の経験を思わせるしみじみとした感情の深い作品も魅力的でした。

俳句という文芸に親しみ、詠むことを喜びと捉えている姿に共鳴を深くしました。

(特選句)

○一句目 山国に住む人の新年を祝う気持ちが明るく伝わってきます。新年への明るい希望を山の表情として描いた新年にふさわしい作品です。

○二句目 中国大陸からはるかな旅をつづけ地上に降る黄砂を、北岳の雪とともに印象深く描いています。北岳の雪が黄砂の色に染まるかのようです。

○三句目 早春の白根三山を大きく捉え、風土の印象が強い作品です。春雪に光る白根三山が神々しい姿で連なっている姿が浮かびます。

○四句目 秋の野に咲く名もない花が風に揺れる姿を自由自在に描いています。ひっそりと咲く紫や青の淡い色の花が見えてくるようです。

○五句目 あたたかく静かな春の雨の雨粒の美しさが描かれています。清らかで澄んだ水滴となった春の雨が枝に宿る様子を思いました。

保坂敏子選

■特選■

草川に雲の影ある啄木忌

富士川町 有泉 よ志枝 八五歳

ひよつとこに我が名呼ばるる村祭

都留市 板津 松男 七五歳

あるがまま吹かれるままに草の花

富士河口湖町 梶原 道彦 八一歳

花冷えの厨の梁に火伏札

韭崎市 小林 久子 九二歳

補聴器も眼鏡もはずし日向ぼこ

富士吉田市 加々美 富雄 七八歳

■秀作■

手を借りる立ち居となりぬ寒牡丹

大月市 後藤 はるよ 七九歳

命毛の墨たつぷりと筆はじめ

甲府市 野澤 勲 八九歳

白梅の空にはじけしポップコーン

市川三郷町 山口 佳代子 七四歳

揺り椅子に父の熟寝や養花天

都留市 野中 定代 七七歳

隆誕祭駄菓子のにゴッホの絵

北杜市 半田 芳江 七四歳

笹鳴や峠の茶屋のあたりより

南アルプス市 安井 日出夫 八五歳

雲の峰吾にもありし壮年期

北杜市 大柴 節子 九一歳

伏せ葱の立ちあがるとき風やさし

韭崎市 伊藤 啓子 八〇歳

盆提灯ふたつ並びて揺らぎをり

韭崎市 山本 栄子 七一歳

山負うて負うて喜寿なり春田打

北杜市 八代 菜美子 七六歳

【評】

応募作品七二六句を拝見していると、毎日をいきいきと暮らしている様子がかうかがえます。喜寿は勿論、傘寿、卒寿などの作品は楽しく、微笑ましく、これは「ふれあいや生きがいづくりを促進し、明るく活力ある健康長寿社会づくりを推進する」というシルバークン大会の目的を十分に達成している証ではないでしょうか。これからも、季節を通して自然に生かされていることを知り、俳句のある生活が楽しいと思える作品作りをしてほしいと思います。

○(特選句)

○一句目 ぼつかりと浮かんだ春の雲、その雲を川面に映しながら流れる小川のせせらぎを聞いてると春の只中に天折した啄木のことか思い出されます。「啄木忌」によって印象づけられた春の景。

○二句目 収穫を祝って行われる村祭。秋晴の神社の境内は老若男女で賑わっています。名前を呼ばれて振り返ると、屋台の前にひよつとこの面。「おお、元気が」と。久しぶりに聞く竹馬の友の声。

○三句目 春や夏の花と違って、秋に咲く野の花はどこかひっそりと寂しげです。時おり吹き過ぎる秋風に抗うこともしないで花や葉をなびかせている姿にはそれなりの美しさがあります。

○四句目 実際に役立つのは消火器ですが、昔から人々は火伏の札を貼って神仏の神通力に頼ってきました。いつも目にはいる梁の火伏札が花冷えの今日はことさら鮮烈に見えるよつです。

○五句目 冬は縁側や日溜り太陽の恩恵に浴してぼかぼかと温まるのが最上の歓びではないでしょうか。そんなときは、何も見ず何も聞かず、ただただ心を無にすることが肝心なのです。

長田群青選

■特選■

木枯や高層ビルのゴッホ展

山梨市 的場 けさみ 六八歳

芹を摘む富士湧水を濁らせて

富士吉田市 三浦 恒子 九二歳

錫杖の音下りてくる山の春

北杜市 伊藤 政雄 八三歳

花冷えの厨の梁に火伏札

韮崎市 小林 久子 九二歳

炊き出しの寸胴鍋や雪催

大月市 清水 健一 八四歳

■秀作■

楽団の点字楽譜やクリスマス

都留市 松沢 節子 七七歳

弾みつつ廂こぼれる初雀

西桂町 梶原 とき子 八三歳

群青の空へ梅の香立ち上る

中央市 佐々木 いづみ 八四歳

起き抜けの肩をすぼめて初不動

上野原市 瀧森 千絵美 六九歳

寒明けの富士笠雲を纏ひをり

富士吉田市 渡辺 久美子 七五歳

北岳の雪をけぶらせ黄砂降る

甲府市 津金 文夫 八五歳

吊橋に乗れば芽吹き山動く

甲府市 小林 さち枝 八五歳

柏餅つまむ庭師の鉄餅舐

甲斐市 乙黒 明雄 七五歳

手を借りる立ち居となりぬ寒牡丹

大月市 後藤 はるよ 七九歳

あるがまま吹かれるままに草の花

富士河口湖町 梶原 道彦 八一歳

【評】

自分の人生には特別なことなど何もなかった、と思う人でも、じっくりと思い出し、てみると、結構ドラマチックな場面があったりするものだ。さまざまな体験を経て、人は、若い頃とは違ったものの見方や感じ方を身につける。今年の山梨県シルバークン大会にも歩んできた人生の陰翳の垣間見える作品がたかくさんあった。

(特選句)

○一句目 高層ビルの、おそらく高階の一室に、ゴッホの絵が飾られている。その絵を今見て来たばかりなのだ。木枯の中で炎のようなタッチの絵が蘇る。

○二句目 早春の富士岳麓。歳月をかけて地中深く蓄えられた水が、湧水として溢れ流れる。摘んだ芹の根を洗うと、水が一瞬濁った。富士の湧水への感謝の情が籠もる一句。

○三句目 「錫杖」は頭部が錫で作られ、いくつかの輪っかが掛けられている。暖かな春の日の差す山道を登っていると、「チャリン、チャリン」という錫杖の音が響く。修行中の僧が修験者が下りて来るのだらう。「山の春」の大きな捉え方がいい。

○四句目 「梁」と言っただから、村の庄屋を務めたよつな旧家を想像する。毎日の煮炊きの煙に燻され真っ黒になった太い梁。そこにくすんだ火伏札が貼りついている。折からの花冷。人の営みに込められた情念が身に沁みる。

○五句目 一月の能登の災害の現場が生々と浮かんで来る。作者は炊き出しに使われる鍋が寸胴であることに目を留めた。「すんどろ」という言葉の響きに非日常を思う。「雪催」は不安を更に大きくする。

■ 佳作 ■

屠蘇を酌む富士の風花てふ地酒

富士吉田市 鈴木文代 七一歳

紅白の旗立つ祠花明り

都留市 小笠原 勇 九二歳

卒寿へと近づく一步春めける

南部町 芦澤 一 醒 八九歳

旅立ちに高く羽ばたけつばめの子

甲州市 志村 栄 治 八五歳

ふきのとう摘む野仏の別れ道

富士吉田市 舟久保 エイ子 八五歳

冴返る一番鶏のひとしきり

山梨市 宮本 みよ子 七二歳

健啖の九十一歳草萌ゆる

大月市 秋山 多美子 九一歳

半世紀会はぬ友より初電話

南アルプス市 阪本 ミツイ 八四歳

田植え機の運転は夫風さやか

北杜市 内藤 とし子 七二歳

富士川の砂を巻きあげ春疾風

身延町 切金 美 雪 六八歳

老ひ知らぬ夢ふつつと春の丘

北杜市 金子 至 八〇歳

分かち合ふ日々の暮しや黄水仙

笛吹市 石倉 正 明 七三歳

ふる里をやさしく包む春の山

笛吹市 菊嶋 なほ子 九四歳

花便り主無きままの車椅子

甲斐市 乙黒 明 雄 七五歳

名瀑の音静かなる冬の虹

都留市 松野谷 洋子 八二歳

秋の日のにおいクレヨンとび出せり

中央市 矢崎 寿美子 七五歳

笠雲の消えてしぐるる富士の裾

富士河口湖町 流石 絹 代 八八歳

爪切りて冬至の朝がはじまりぬ

甲斐市 青柳 俊 子 九五歳

稲架解いて真向う富士や茜雲

都留市 小笠原 直 江 九〇歳

小晦日雲の欠片も見当らず

甲府市 河野 一 郎 七〇歳

滾つ瀬に反り返り飛ぶ上り鮎

甲府市 渡辺 優 八七歳

初明り夫の残せし車にも

都留市 大澤 茂 子 七九歳

父を恋い母を恋う日や着ぶくれて

都留市 前田 智 子 八〇歳

竹林の葉擦れの音や暮の秋

南アルプス市 塩澤 弘子 八一歳

めでたさや干支八巡の年男

甲府市 有泉 和夫 九五歳

天高し戦馬出土の遺跡群

南アルプス市 小松 重和 八七歳

霜月や神馬由来の里神楽

南アルプス市 小松 美子 七五歳

暮れかぬるニーチェ紐解く古机

笛吹市 辻本 美代子 七〇歳

大寒や月と寄り添う明けの星

富士河口湖町 渡邊 たき子 八七歳

芋の葉の影をつくれる良夜かな

富士河口湖町 坪井 美智子 八四歳

裸木の上枝に光る星一つ

甲斐市 高橋 正 八八歳

葉の付くもありし柚子湯に身を任せ

山梨市 坂本 好子 八六歳

十五夜をぬすつと兎らがとりに来る

笛吹市 野沢 絹子 八六歳

暮れ方の雨上るらし花八ツ手

甲府市 村松 幸治 七四歳

砲声の富士をとよもす花野かな

富士吉田市 宮下 定治 八七歳

肌寒や木魚を叩く僧の背

都留市 板津 松男 七五歳

山寺に響くジャズの音十三夜

北杜市 道村 典子 七二歳

冬銀河古墳の丘を包み込み

甲府市 刃刀 佳秋 六九歳

押し花のはらりと落ちし曝書かな

笛吹市 渡辺 伊都子 八九歳

しよい籠の向日葵揺らし老女来る

大月市 中西 利彦 八四歳

桃の花歳とることの楽しくて

富士吉田市 加々美 敦子 七七歳

指先に香り移りぬ蓬摘み

笛吹市 石倉 正明 七三歳

妣織りし機場に小さき鏡餅

富士吉田市 渡辺 喜作 八三歳

地虫出づ勾玉に似て鍬の先

韮崎市 小林 久子 九二歳

慰霊碑の「震」のひと文字冴返る

甲斐市 中込 儀一 八七歳

※「年齢」は令和六年六月十四日現在です。

(山梨県シルバー俳句大会展示初日)